

串本海中公園 マリンパビリオン

2026. 1

Vol. 55, No. 1



アオウミウシ

Hypselodoris festiva (A. Adams, 1861)

本種はイロウミウシ科アオウミウシ属に属する。最大体長は約 3 cm。体形はナメクジ型で体の地色は青色。外套膜の周縁部は黄色、体の正中線上に黄色い縦線が 1 本、その周辺に黄色や黒色の斑点がある。外套膜の模様には変異があり、斑点が無い個体もいる。触角は細長く先端がやや尖り、橙色の褶葉がある。鰓は外套膜の後方に位置し円形に広がり、中心には肛門がある。鰓の地色は白色で軸が橙色。触角と鰓は刺激を与えると引っ込む。串本では潮間帯から水深 20 m 付近で周年観察されるが、特に春から初夏にかけてよく見られる。

松永 康大

和歌山県串本町から得られたゴボウウツボと
本県におけるオナガウツボの記録の再検討

Record of *Strophidon tetraporus* from Kushimoto,
Wakayama Prefecture, Japan, with a reassessment of records
of *Strophidon sathete* in Wakayama Prefecture.

大西 遼

ウツボ科タケウツボ属 (*Muraenidae: Strophidon*) はインド・太平洋域に広く分布し (Huang et al., 2020)、国内からはオナガウツボ *Strophidon sathete* (Hamilton, 1822)、ゴボウウツボ *S. tetraporus* Huang & Liao, 2020、タケウツボ *S. ui* Tanaka, 1918、およびタケウツボ属の一種 *S. sp* が記録されている (日比野, 2025; 本村, 2026)。このうちゴボウウツボは 2020 年に新種として記載された比較的新しく認識された種で、全長約 3 m まで成長する大型のウツボである (Huang et al., 2020; 小枝, 2020)。本種は従来、オナガウツボと混同されており (Huang et al., 2020; 小枝, 2020)、国内における多くの記録が誤りであると考えられている (日比野, 2025)。本種は国内では三重県以南から記録されており (日比野, 2025)、和歌山県では池田・中坊 (2015) により報告された田辺湾産のオナガウツボが、その後の研究でゴボウウツボと再同定されている (小枝, 2020)。本県からは他にも美浜町沖 (上出, 2011) と串本町 (松下, 1981; 宮脇, 1983; 福田・御前, 1992; 宮脇, 1995; 御前, 2007; 平林, 2017; 大西, 2024) でオナガウツボが記録されているが、これらの記録にはゴボウウツボが含まれている可能性が高い。

2025 年 11 月 22 日に本県串本町から 1 個体のゴボウウツボが採集されたため、本種の分布に関する知見の蓄積のためここに報告する。また、これまで和歌山県においてオナガウツボとして記録された個体の種の再検討を行ったため、併せて報告する。

材料と方法

採集された標本は生鮮時の写真撮影を行い、冷凍保存した。標本の計測はメジャーを用いて 1 cm

の精度で測定した。本報告に用いた標本は串本海中公園センター (KMPC) に保管されている。

結果と考察

Strophidon tetraporus Huang & Liao, 2020

ゴボウウツボ (図 1)

標本: KMPC-102524F、全長 2240 mm、和歌山県東牟婁郡串本町串本港 (宮川河口)、水深 5 m 以浅、2025 年 11 月 22 日、釣り、和歌山県漁連串本支部。

上記標本は、体が暗褐色であること、尾部の長さが短く、肛門が体の中央付近に位置すること、眼は口裂中央よりも前方に位置すること、眼下感覚管孔が吻端から等間隔で 4 つ並び、4 つ目は眼の後縁よりも後方に位置すること、主上顎骨の内側歯が 5 本、および下顎の内側歯が 4 本であることが Huang et al. (2020) の示したゴボウウツボの特徴と一致したため本種に同定された。

本種は従来オナガウツボと混同されていたが、眼下感覚管孔が 4 つ (後者は 3 つ) であることや、尾部の長さが短い (長い) ことなどにより識別される (Huang et al., 2020; 小枝, 2020; 日比野, 2025)。

本種は西太平洋に広く分布し (Huang et al., 2020)、国内では三重県賀田湾、和歌山県田辺湾と串本町、鹿児島県薩摩半島、内之浦湾、甬島列島 (下甬島)、および奄美大島から記録されている (小枝, 2020; Koreeda & Motomura; 日比野, 2025; 本報告)。

今回採集された個体は、串本町串本港の宮川河口付近の泥底から釣獲された。採集後は当館に搬入されたが、翌日に死亡した。なお、串本町では紀伊大島のダイビングポイントである内浦ビーチでタケウツボ属が頻繁に観察および撮影されている。同所で観察されている個体は現在「オナガウツボ」としてダイバーに周知されているが、2025 年 12 月 5 日に撮影された個体は、体が暗褐色であること、眼が口裂中央よりも前方に位置すること、および眼下感覚管孔が 4 つ並び、4 つ目が眼の後縁よりも後方に位置することからゴボウウツボに同定された (図 2)。

和歌山県におけるオナガウツボの記録について、松下 (1981) は 1981 年 10 月 17 日に串本海中公園センター地先の海岸に設置された定置網に羅網した全長約 2.2 m のオナガウツボを報告した (図 3A)。その後、宮脇 (1983) は松下 (1981) により報告された個体は串本海中公園センターで飼育されており、約 2 年で全長 2.42 m に成長したと報告されている (図 3B)。しかし、松下 (1981) と宮脇 (1983) によって報告された個体は (図 3)、標本の有無が不明で、眼下感覚管孔の数や肛門の位置が確認できなかったことから種同定ができなかった。福田・御前 (1992) は串本海中公園センターで記録された魚類をリスト化し、その中に定置網で捕獲されたオナガウツボを含めた。この記録は松下 (1981) と宮脇 (1983) で報告された個体に基づいている可能性が高いが、詳細は不明

である。宮脇 (1995) は、串本町袋港で採集された約 2 m のオナガウツボ (1995 年採集?) を報告したが、標本の有無や写真が掲載されておらず、種の再検証ができなかった。御前 (2007) は串本町紀伊大島に設置された定置網により捕獲された 1 個体のオナガウツボを報告しているが、写真が掲載されておらず標本の有無も不明であるため、種の再検証ができなかった。上出 (2011) は本県美浜町沖 (日ノ岬) の水深 30 m から漁獲された全長 2.27 m のオナガウツボを報告した。本標本 (HUMZ 209187) は北海道大学総合博物館 (HUMZ) に保管されており、眼下感覚管孔が 4 つ並び、4 つ目は眼の後縁よりも後方に位置していたことからゴボウウツボに再同定された (図 4)。波戸岡 (2013) は、オナガウツボの分布に和歌山県日ノ岬、田辺湾、串本町を含めたが、分布の根

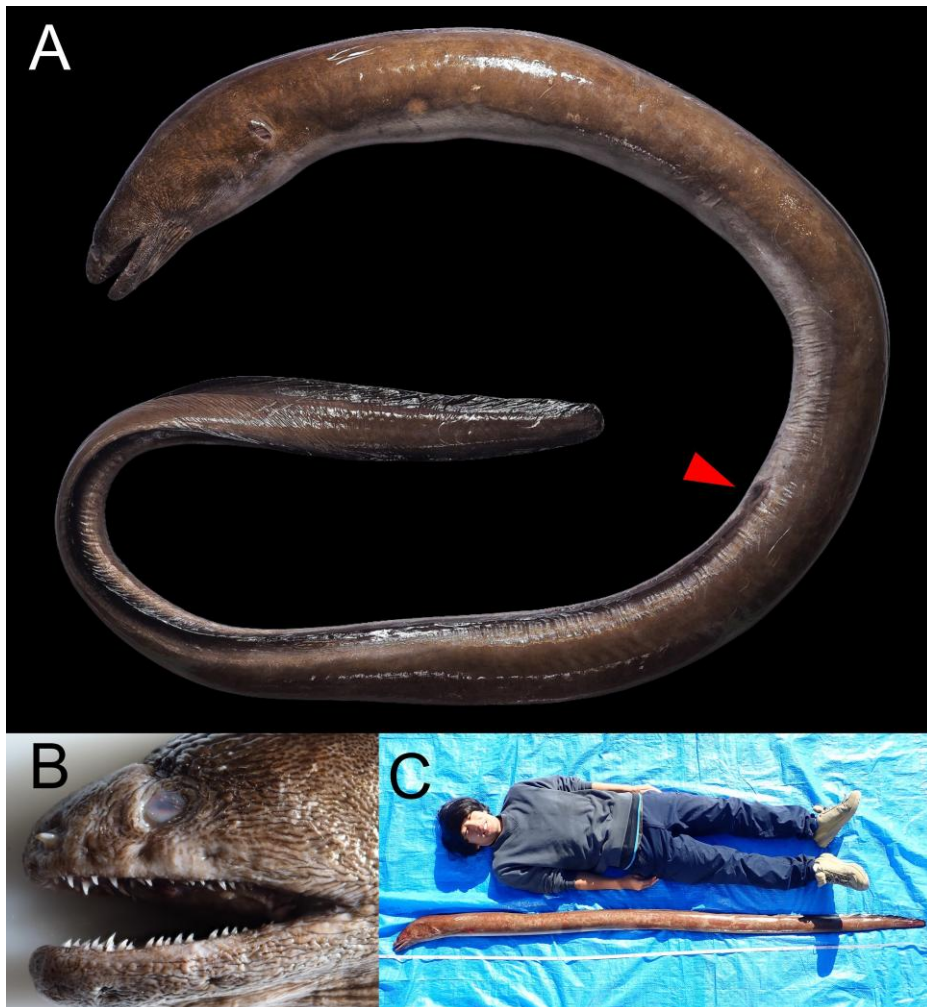


図 1. 和歌山県串本町から得られたゴボウウツボ (KMPC-102524F、全長 2240 mm)。A : 全体 (矢印は肛門の位置を示す)、B : 頭部、C : 筆者との比較



図2. 筆者により2025年12月5日に串本町紀伊大島の内浦ビーチ（水深26m）で撮影されたゴボウツボ

抛となった標本の情報については不明であるため種の再検証ができなかった。池田・中坊(2015)は田辺湾から3標本のオナガウツボを報告した。このうち九州大学総合研究博物館(KYUM)に保管されている1標本(KYUM-PI2673)は小枝(2020)によりゴボウツボと再同定されている。また、大阪市立自然史博物館(OMNH)に保管されている田辺湾産1標本(OMNH-P10340、肛門前長790

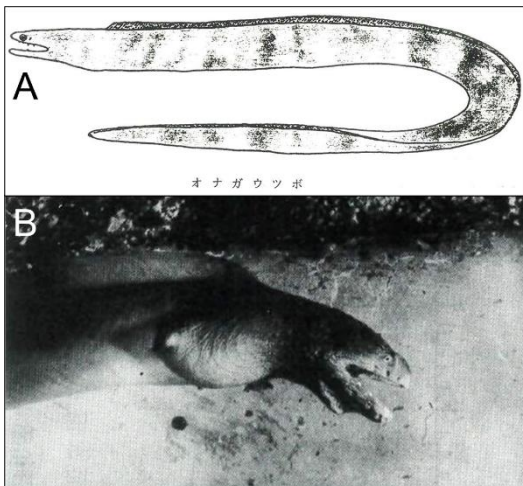


図3. A: 松下(1981)により図示されたオナガウツボ、B: 宮脇(1983)により図示されたオナガウツボ[松下(1981)と同一個体]一部改変



図4. 上出(2011)により報告された和歌山県美浜町産のゴボウツボ(HUMZ209187)の頭部

mm、尾部長1003mm、1996年11月9日採集)は、眼下感覚孔が4つ並び、4つ目が眼の後方付近に位置すること、主上顎骨の内側歯が5/4本であること、下顎の内側歯が3/2本であることからゴボウツボに再同定された(日比野、私信)。なお、和歌山県立自然博物館(WMNH)に保管されている田辺湾産1標本[WMNH-PIS-WW02204(2)、全長1.87m、1996年11月16日採集)は、現在同館には保管されておらず所在が不明となっている(揖、私信)。平林(2017)は串本海中公園センターで飼育された2個体(2011年6月、2014年4月搬入)のオナガウツボの飼育について報告したが、写真が掲載されておらず標本の有無も不明である。なお、同館で2013年6月27日に撮影されたオナガウツボとして飼育展示されていた個体の写真が残されていたが、眼下感覚管孔の数が確認できず、種同定ができなかった(図5)。大西(2024)は串本町で記録されたオナガウツボを福田・御前(1992)と御前(2007)に基づき報告し



図5. 平林(2017)により報告された個体と思われる生体写真(2013年6月27日撮影)

たが、上述のとおり、これらの記録は種の再検証ができなかった。以上から、和歌山県沿岸ではオナガウツボの確実な記録は見当たらず、本県沿岸における再検証が可能なオナガウツボの記録はすべてゴボウウツボであることが明らかになった。また今回串本町から得られたゴボウウツボは再検証可能な同町からの初めての記録となる。今後、国内におけるゴボウウツボとオナガウツボの詳細な分布を明らかにするには、これまでに報告されたオナガウツボを含むタケウツボ属各種の種の再検証を行う必要がある。

謝辞

和歌山県漁連串本支部の皆さまには貴重な標本を寄贈していただいた。北九州市立自然史・歴史博物館の日比野友亮氏には原稿に対して多数のご助言をいただくとともに、田辺湾産の標本 (OMNH-P10340) データをご提供いただいた。鹿児島大学大学院連合農学研究科の是枝伶旺氏には水中写真の同定にご協力いただいた。北海道大学総合博物館・水産科学館の田城文人氏には美浜町産の標本情報についてご教示いただくとともに、写真をご提供いただいた。和歌山県立自然博物館の揖善継氏には田辺湾産の標本についてご教示いただいた。以上の方々はこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

引用文献

福田照雄・御前 洋. 1992. 串本海中公園センターで記録された魚類一覧 (1). マリンパビリオン, 21: 26-29.

波戸岡清峰. 2013. ウツボ科, pp. 244-261, 1786-1792. 中坊徹次 (編). 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.

日比野友亮. 2025. ゴボウウツボ, p. 50. 木村清志・笹木大地 (編). 美し国の魚たち 三重県の魚類図鑑. 木村清志, 伊勢.

平林 勲. 2017. オナガウツボの飼育とその課題. マリンパビリオン, 46: 34.

Huang, W.-C., A. Mohapatra, P. T. Thu, H.-M. Chen and T.-Y. Liao. 2020. A review of the genus *Strophidon*

(Anguilliformes: Muraenidae), with description of a new species. *Journal of Fish Biology*, 97: 1462-1480.

池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. xxii + 597 pp.

小枝圭太. 2020. ゴボウウツボ, pp. 64-65. 小枝圭太・畑晴陵・山田守彦・本村浩之 (編) 大隅市場魚類図鑑. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

小枝圭太. 2022. ウツボ科, pp. 23-27. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編). 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

Koreeda, R. and H. Motomura. 2025. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of the Koshiki Islands and adjacent waters, Kagoshima, southern Japan, with 353 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 21: 1-119.

松下 甲. 1981. 水族館とぴっくす No. 17 日本一ジャンボなウツボ. マリンパビリオン, 10: 61.

御前 洋. 2007. 定置網で捕獲された魚種について (12) -2006年の結果-. マリンパビリオン, 36: 44-45.

宮脇逸郎. 1983. オナガウツボの遠征. マリンパビリオン, 12: 51.

宮脇逸郎. 1995. 「まさか」で採集されたオナガウツボ. マリンパビリオン, 24: 3.

本村浩之. 2026. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 36. <https://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/jaf.html> (2026年2月15日参照)

大西 遼. 2024. 串本海中公園センターで記録された魚類. マリンパビリオン, 15: 1-24.

上出貴士. 2011. 和歌山県日ノ岬周辺で漁獲されたオナガウツボ *Evenchelys macrurus* とヒブダイ *Scarus ghobban*. *南紀生物*, 53: 146-148.

2025 年 鯖浦定置観測結果

中村 公一

串本海中公園センターでは設立翌年の 1971 年以來 54 年にわたって (通年データは 52 年)、地先 (鯖浦) 沖に設置された海中展望塔において毎朝 9 時に気象観測が行なわれている。本文では、その中から 5 項目に関する 2025 年の観測結果を報告する。なお、本文中の平年値とは 1991 年から 2020 年までの 30 年間の平均値である。また、観測方法の詳細については本紙 Vol. 22, pp. 16-17 を参照されたい。

《気 温》

年平均値は 18.3°C で、前年比 -0.4°C、平年比 +0.2°C であった。日最低値は 0.3°C (1 月 10 日)、日最高値は 32.2°C (8 月 3 日) である。各月の平均値を平年値と比較すると 1 月、2 月、5 月、11 月は平年値を下回り、その他の月は平年値を上回った。特に 2 月は -2.5°C と大きく下回った。また、前年値と比較すると、1 月が -1.9°C、2 月は -4.6°C、11 月が -2.5°C と大きく下回った一方で、12 月は +3.0°C と大きく上回った。

《表面水温》

年平均値は 22.2°C で、前年比 +0.6°C、平年比 +0.6°C であった。日最低値は 15.1°C (2 月 25 日)、日最高値は 29.6°C (8 月 3 日) であった。各月の平均値を平年値と比較すると、1 月、2 月、4 月、5 月、8 月は下回り、その他の月は上回った。特に 7 月は +2.5°C、10 月は +2.2°C とその差が大きい。前年値と比較すると 2 月、5 月、8 月、9 月は下回っている。特に 2024 年に月間平均水温が過去最高となった 8 月、9 月と比べると -1.6°C、-1.2°C と大きく下回っている。なお、2025 年は 7 月、10 月、11 月において月間平均水温が過去最高値を記録している。

《塩分濃度》

年平均値は 34.9‰ で、前年比 +0.4‰、平年比 ±0.0‰ であった。日最低値は 32.2‰ (9 月 5 日)、日最高値は 36.8‰ (7 月 31 日) である。平年値と比べると 7 月、8 月のみで上回り、その他の月は同

値または下回っている。また、前年値と比べると全ての月において上回った。

《降水量》

年間の総降水量は 187.2 mm で、前年比は -861.8 mm、平年比は -621.3 mm であった。一日降水量が最も多かったのは 9 月 5 日の 147.4 mm であった。平年値と比較すると 5 月、10 月、12 月で上回り、その他の月では下回る結果となった。2024 年も台風が少ない年だったが、2025 年においても紀伊半島に接近する台風が少なく、さらに梅雨も短かったので 6 月から 8 月の降水量は少なめであった。

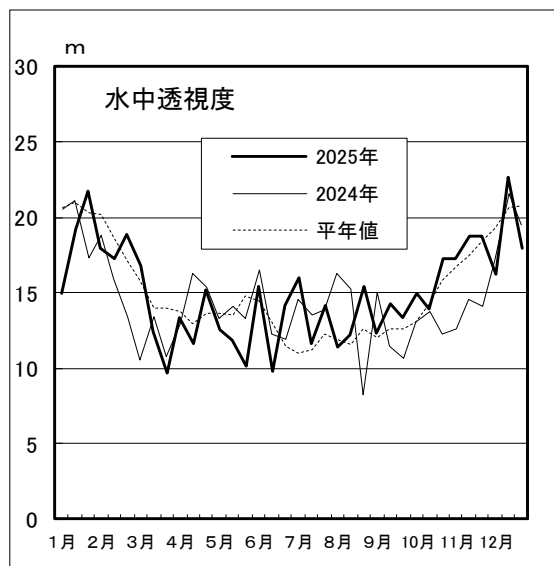
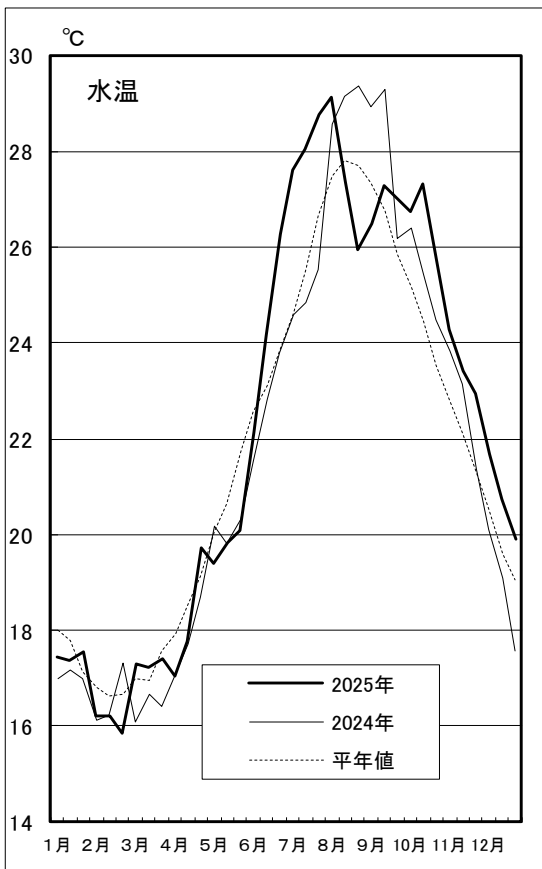
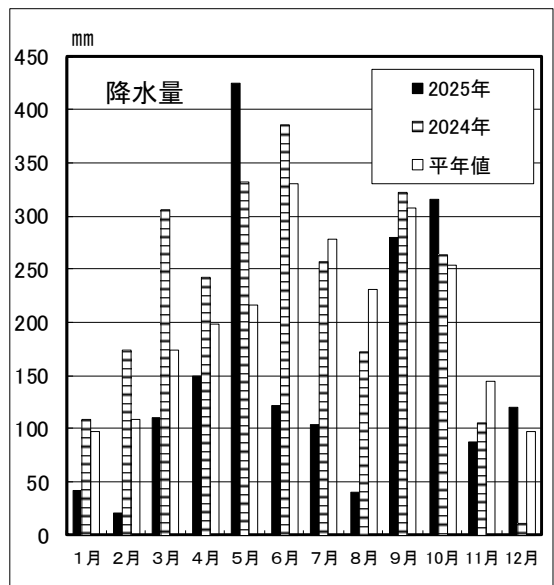
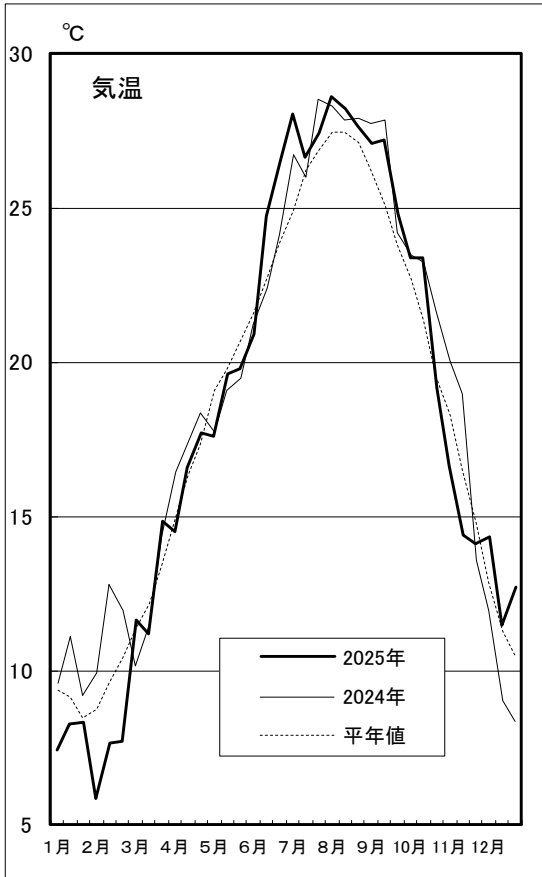
《水中透視度》

年平均値は 15.0 m で、日最低値は 1 m (6 月 18 日)、日最高値は 30 m (1 月 23 日) で、前年比は +0.4 m、平年比は -0.2 m であった。各月の平均値を平年値と比較すると、1 月から 3 月および 5 月、12 月が下回った。

《まとめ》

以前、本誌にて 2025 年夏期の水温の推移について報告した (Vol.54, p.36)。6 月から水温が上がり始め 7 月には月間平均水温が同月の過去最高を記録した所までの報告であったが、その後は 8 月、9 月の月間平均水温はほぼ平年値並みの水準まで下がったが、10 月からの水温の下がり方は例年以上に緩やかで、先述の通り 10 月、11 月の月間平均水温についても過去最高値を記録し、10 月から 12 月までの 3 か月分の平均水温を見ても過去最高となった。

これらの要因の一つとして考えられるのが夏期の雨量の少なさであろう。2025 年、近畿地方は統計開始以降で最も早い梅雨明け (6 月 27 日) となり、さらに紀伊半島に台風が接近しなかったことも加わり、6 月から 9 月までの 4 か月間の総降水量は過去最少となった。そして最も大きく影響していると考えられるのが黒潮の流路である。報道でもあった通り、気象庁は 2025 年 4 月に過去最長となるおよそ 7 年 9 か月にも及んだ黒潮の大蛇行が終息していたと 8 月末に発表した。この流路変動は串本の海中環境に大きな変化をもたらす可能性が示唆される。



鯖浦の海から

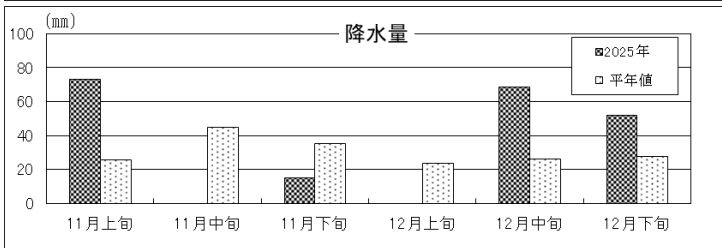
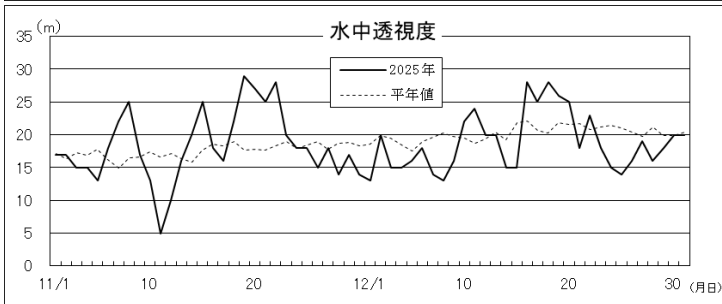
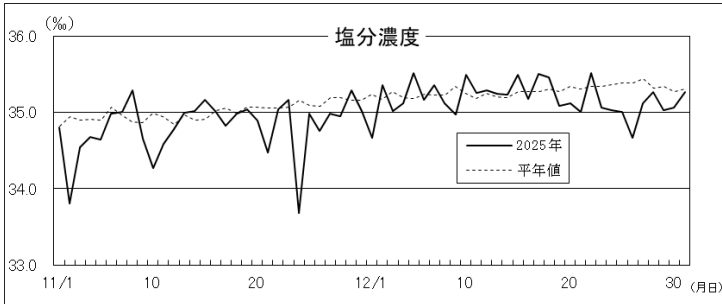
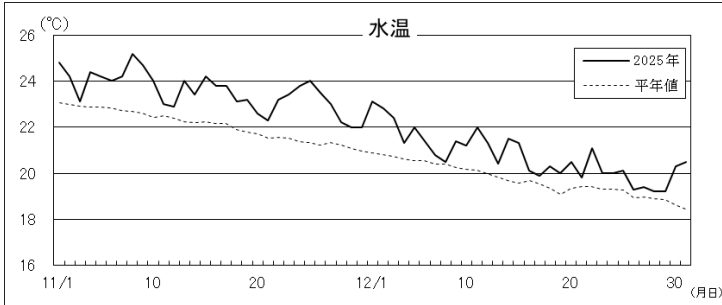
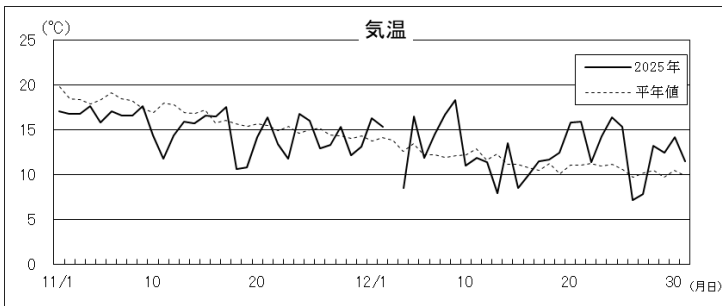
森 美枝

紀南地方は記録的な少雨が続けている。潮岬のアメダス観測点では、1月の降水量は0mmだった。1913年9月の観測開始から112年間で、2011年と並ぶ過去最低の記録である。私の弟は三重県南部のみかん農家をしているが、少雨の影響で毎日水やりに追われている。

陸では水不足や農作物の影響が心配される一方で、海は一見すると、魚やサンゴが生き生きとして、問題がないように見える。しかし、雨が降らないことも、実は海の生物にとっては静かな負担になっているかもしれない。

雨は山と海をつなぐ重要な役割がある。雨水は土の栄養を川へ運び、川を通じて海へと届ける。沿岸で豊かな生物が見られるのは、雨のおかげでもある。例えば、カキやアサリなどの貝類は海中の植物プランクトンを濾し取って食べている。その植物プランクトンは山から川を通じて運ばれるリンや窒素などを栄養にして育つ。少雨によってその供給が減れば、貝は十分に育たず、生産量も落ちてしまうだろう。

平年並みの雨が欲しいところだが、近年の天候は両極端で、普通が普通ではなくなってきた。どんなに科学が進んでも天候を思い通りにすることはできない。せめて私たちは、海の静かな変化に気づき、未来にも豊かな海が残せるよう考えていくことが大切である。



鯖浦定置観測結果(月平均値と平年値比)

	11月		12月	
	観測値	平年値比	観測値	平年値比
気温	14.7°C	-1.8°C	12.8°C	+1.3°C
水温	23.5°C	+1.5°C	20.1°C	+0.4°C
塩分濃度	34.8‰	-0.2‰	35.2‰	-0.1‰
水中透視度	18.2m	+0.7m	18.9m	-1.3m
月間降水量	88.2mm	-17.4mm	120.4mm	+43.3mm

マリンバザリオン Vol.55, No.1 通巻 504 号

発行日 令和8年2月21日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県東牟婁郡串本町有田 1157

(株) 串本海中公園センター

電話&FAX 0735-62-4875

ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>

(本誌は上記からも無料配信中)